

上関地点 2022年度 環境監視調査結果について(報告書の概要)

2022年度の水質調査結果は、管理目標値を満足していた。

陸生、海生生物については、過去の調査結果と比較して顕著な変化は見られなかった。

項目		調査時期	調査結果概要		
水質	陸域工事排水の水質	月1回	水素イオン濃度、浮遊物質量ともに管理目標値内であった。		
			項目	調査結果	管理目標値
			水素イオン濃度	6.8~7.5	5.0以上9.0以下
			浮遊物質量 (日平均値)	6mg/L 以下	150mg/L 以下
陸生生物	ハヤブサ	4月:2回/月 5月:2回/月 6月:2回/月 2月:1回/月 3月:2回/月	2022年度は、4月に2羽のヒナを確認し、5月から6月にかけて巣立ちした幼鳥2羽を確認したことから本年度の繁殖は成功した。また、親鳥を各月で確認した。		写真1
	植生	年1回※1 5月9、10日	イヨカズラを7箇所16株、ジュウニヒトエを32箇所168株、イヌノフグリを6箇所226株、キンランを1箇所1株、ギンランを1箇所2株、ビヤクシンを1箇所1株確認した。		写真2
海生生物	潮間帯生物	年2回 4月19、20日 10月11~13日	植物ではワカメ、ヒジキなど56種、動物ではアマガイ、イワフジツボなど53種を確認した。 【確認種類数】・植物:春56種、秋28種 ・動物:春43種、秋45種		写真3
	海藻草類		ノコギリモク、サビ亜科など61種を確認した。 【確認種類数】春55種、秋26種		
	底生生物		ムラサキウニなど6種を確認した。 【確認種類数】春5種、秋6種		
	スナメリ	3月~10月※2 (週1回・計32日)	確認回数は計64回、延べ135頭を確認した。		
	カクメイ科等の貝類	年4回 5月12、13日 8月1~3日 11月9~10日 2月8、9日	カクメイ科等の貝類は確認されなかった。 タイドプール※32箇所のうち1箇所は、2010年に岩盤の崩落が確認されて以降、引き続き崩落の恐れがあるため、1箇所調査を実施した。		

※1 過去の調査結果を踏まえ、2回/年から1回/年に調査頻度を見直し

※2 スナメリ調査は2022年3月から開始

※3 タイドプール:干潮時に海辺の岩場にできる潮だまり

【参考】

《環境監視計画以外の環境調査》

- カムリウミスズメ(写真4)

2022年度調査の結果、計画地点周辺海域において7回延べ11個体を確認した。

計画地点周辺海域において広く確認されたが、工事施行区域内での出現はなかった。

- カラスバト(写真5)

2022年度調査の結果、計画地点において、11月に鳴き声を確認した。

鼻線島においては、5月に姿、8月、10月、11月、1月、2月に姿および鳴き声、9月、3月に鳴き声を確認した。

- 鼻線島におけるミサゴの繁殖状況について
2022年7月に巣立ち後の幼鳥3羽を確認できたことから繁殖は成功した。(写真6)
今後も繁殖が継続して行われる可能性があるため、引き続きの生息状況を確認する。
- 鼻線島におけるクロサギの繁殖状況について(写真7)
2022年7、8月に既知巣内でヒナ2羽および親鳥の出入りを確認し、9月にも周辺の岩場で3羽が同時に確認された。今後も繁殖が継続して行われる可能性があるため、引き続きの生息状況を確認する。

《その他》

- 新たに営巣が確認されたミサゴについて
埋め立て予定地内の小島*で3月に親鳥(雄、雌)による抱卵を確認した。(写真8)
天田島においても3月に造巣を確認した。(写真9)
※埋め立て予定地内の小島は上関町の町木であるビヤクシンの生育が卓越しているため、保存する計画である。
- カクメイ科等の貝類調査において、8月にアラウズマキ(環境省レッドデータブック「絶滅危惧Ⅱ類」)を2個体確認した。(写真10)

【調査写真】

写真1:ハヤブサ



(左:ふ化後10日前後のヒナ、右:親鳥(雌)(2022年4月12日撮影))

写真2:植生



イヨカズラ



ジュウニヒトエ



イヌノフグリ



キンラン



ギンラン



ビヤクシン

写真3:海生生物



ヒジキ



アマガイ



ノギリモク



ムラサキウニ

写真4:カンムリウミスズメ



(7月7日 天田島の南東)

写真5:カラスバト



(1月31日 鼻線島)

写真6:ミサゴ



(6月7日 鼻線島)

写真7:クロサギ



(7月14日 鼻線島)

写真8:ミサゴ(小島)



3月28日

写真9:ミサゴ(天田島)



3月28日

写真10:アラウズマキ



(8月1日)

環境監視委員会 委員からのコメント

【2022年度環境監視調査結果について】

項目	主なコメント
水質 (陸域工事排水)	水質調査結果は管理目標値内であり、大きな変化は見られておらず、環境保全措置が適切に実施されている。
陸生生物 (ハヤブサ)	2022年度は、2羽の幼鳥の巣立ちを確認しており、繁殖は成功している。また、親鳥の生息を各月で確認しており、引き続き状況を確認すること。
陸生生物 (植生)	経年変化は過年度のデータから見ても自然変動の範囲内であり、工事のない状況においても自然要因による増減が確認されている。
海生生物 (潮間帯生物、海藻草類、 底生生物)	経年比較すると、出現種類数については自然変動による多少の増減が見られており、主な出現種の上位種に変動があることから継続して確認すること。
海生生物 (スナメリ)	経年比較すると、1回確認当たりの頭数は過年度調査とほぼ同等であることが確認でき、顕著な変化は見られていない。
海生生物 (カクメイ科等の貝類)	カクメイ科の貝類は確認されていないが、タイドプールの水質、底質については過年度調査の変動範囲内で、顕著な変化は見られないため、環境保全上、問題ない。

【その他について】

項目	主なコメント
ミサゴ	2022年度は、鼻線島で幼鳥の巣立ちを確認しており、引き続き生息状況を確認する必要がある。 また、新たに営巣が確認された小島、天田島のミサゴについても、引き続き繁殖状況の確認を行うこと。埋め立て予定地内の小島については、工事中に営巣が確認された場合は、工事工程の調整や監視体制の強化を図るなど、貴重な鳥類への環境保全措置と同様の保全措置を講じること。
クロサギ	2022年度は、鼻線島で幼鳥を確認しており、引き続き生息状況を確認する必要がある。
アラウズマキ	アラウズマキの環境保全措置等について、確認されたタイドプールは埋立てしないなど、海生生物と同様の環境保全措置を講じること。

以 上